

生きるということ
－ ダダイスト・辻潤をめぐる －

立命館大学応用人間科学研究科
対人援助学領域
人間形成・臨床教育クラスター

現代はとかく生きづらい世の中である。現代に限らず、いつの時代にも生きづらさを感じていた人はいた。しかしどれだけ生きづらい世の中でも、生きている以上は現状と折り合いをつけていくしかすべはない。世間とのずれを感じながらも、その隔たりを乗り越えようとするのが人生の課題であった。現代において生きづらさの要因となっていることには、共同幻想の崩壊に伴うお定まりの生き方の消失や、個性の尊重を促進させようとする教育現場と個性を排除しようとする現実社会の矛盾性などが挙げられる。また、形而上学的問題に悩まされ続けることも挙げられる。どのように生きるかということは、どのような価値観を持つかということである。人は自分の人生を生きるために、自分なりの価値観を持たなければならない。それが既存の価値観ですむ者もいれば、既存の価値観ではどうしても納得がいかない者もいる。そのような既存の価値観に納得がいかない者は、自分で価値観を作り上げなければならない。自分がより良く生きるために。しかし自分が作り出した価値観に対して自信が持てないこともある。それは自分に対して絶対的価値観を要求してしまっているからだ。しかし価値観とはそのような絶対的な体系を持つものであろうか。価値観の形成には各個人の経験や周囲の環境などが多分に影響を及ぼす。そうであるから新しい経験や周囲の環境の変化などによって、価値観は不断に変化していくものであって当然ではないのか。一つの考え方に固執せず、その時その時の自分の欲望に対して忠実に行動するぐらいの自由さを持つべきではないか。そこでダダイズムという考え方を紹介する。本論ではダダイストとして人生を送った辻潤の考え方を通して、より良く生きるための方法を模索していく。第一章の「辻潤の思想」では、辻の生き様が表現されている文章を通して、辻の思想を紹介していく。第二章の「ニヒリズムとダダイズム」では、辻がニヒリズムとダダイズムについてどのように捉えているかを紹介していく。その上で、辻が最も影響を受けたダダイストであるマックス・シュティルナーについても紹介する。第三章の「人生と価値観」では、生きるということが如何なるものであるか、価値観の形成をどのようにするべきかについて、辻の考え方を通して模索していく。本論を通して、各自が各自なりの生きるということを見つけることの重要性、必要性を説いていく。